

特別審査員講評

講演「平和への思い」

黒井 千次

今、作者が朗読するのをお聞きになったのが、今回の特別賞の作文です。他の作品もそれぞれに面白かったのですが、その中でも、この文章はとりわけ骨格がはっきりして、論理が明確で、そして次から次へと論旨を展開していく力が強く、読んでいてうなづきながらおしまいまで読み通すと、その後にとまとめた考えというものが、しっかりと植えつけられるといった印象を受けました。力のある文章の構成といいましょうか、論理の展開といいましょうか、それは他のどの作品よりもはっきりとしていて、特に優れているという感じがいたしました。そこでこの箱井さんの作文を特別賞に選ぶことにした次第です。今、作者は中学校の三年生、ということは間もなく卒業ですか。中学校まで生きてきたすべてがここに入っていて、それを引っさげて高校に進むということになると思いますので、その力量とそれまでのたくわえを存分に発揮して、一層充実した高校生活を送り、その中で平和について更に突っ込んで考えて下さるといいと思います。

小金井の町というもの、あるいは平和ということについて日ごろ考えている一端を、ここでお話いたしたいと思います。私は、昭和七年一九三二年の生まれですから、日本の敗戦が、一九四五年で、旧制中学の一年生の夏でした。その前に新宿に近い大久保に長いこと住んでおりました、大久保から、空襲の戦禍が迫ってくるといけないからということで、少しでも郊外へという形で、住んでいた知人が地方へ疎開した後の空いた家に入るということになり、中野に引っ越しました。中野でしばらくしていたら、そこも空襲にやられそうなので中野から更に小金井に引っ越しました。中野から小金井に引っ越す前に、一九四四年敗戦の前年の夏八月から六ヶ月間、六年生ですから卒業までの期間、当時通っていた公立小学校が学校ごと長野県に集団疎開することになりました。集団疎開というのは、縁故を頼って東京から爆撃が少ない土地に移り、戦禍を避けるという疎開が個人的にできない子どもたちが残っているわけで、そういう子どもたちを引き連れて、学校ごと、学年ごと、都会ではないとより安全な場所へ、爆撃などが無いようなところへ移そうという計画が実行されたのです。それで、私が通っていた学校は豊島区の国民学校、小学校が国民学校とそのころは呼ばれていましたけれども、豊島区の国民学校から長野県にその学校は疎開することになりました。

たしか三年生以上の生徒が学校ごとに行き先を決められました。そのころの住所でいうと長野県下高井郡平隠村上林、山之内郷上林温泉という志賀高原の下のほうの土地に移りまして、そこで翌年の三月に卒業するまでの期間、集団生活を送らなければいけなくなりました。林間学校とかそういう短い期間の学校の集団生活は経験したことがあっても、何か月も続いて学校のークラスがまとまったまま移ったことはない。四十人とか五十人とか、一つの部屋に十人くらいずつまとまり、一つの学年が四つか五つの班に分かれて、男組、女組があつて、宿るところが宿屋とかホテル、お寺などに違っていたりする集団生活、それは翌年の三月まで続けました。その間の生活の中で、一番辛かったのは寒さでもなければ空腹でもなく、本当に辛かったのはあの別れた班の中、部屋の中での子どもたち同士の集団生活におけるイジメでした。どうしてああいうことが起こるのかわからない。とにかくある種の人間関係が成立する。それで一つの部屋に十人足らずの子どもが入っていて、その中で支配と被支配といった関係が生れる。どの部屋でも同じようなことが起こっていたようです。これは一種の自然なのかもしれないけれども、強い方と弱い方に分かれて、強いやつがいばつて、弱いほうはなんとなくその子分になるといった形の一種のヒエラルキーといひましようか、そういう力の関係というのが生まれました。そこで、いじめとか弱いやつとかいじめられやすいというやつがいて、それに対して、いじめる側とか強いやつというのが出てきまして、なんとなく弱い奴は仲間はずれにされていく。仲間はずれにされたほうは、その仲間はずれの処置をといてもらうために一生懸命強い奴のご機嫌を伺うというふうになる。なにやら隠微な関係というものが小学校六年生の男の子の間に、女の子は分かりませんが、男の子の間に生まれていました。普通は子どもは学校で嫌なことがあつても、帰ってくればうちが、家庭がある。このごろは非常に複雑というか、家庭も難しくなつていて、帰ってくれば安心と簡単にいえないケースもあるようですが、そのころのことを言えば、とにかく家庭がある。そこで集団生活をしていたとしても、たとえば夕方になればうちに帰れるとか、夜になれば家族と一緒に寝られるとかいうことがあればいいのですが、集団疎開という生活はまったく二十四時間同じやつと同じように顔を合わせて、朝起きてから夜寝るまで場合によっては夜寝てからも面をつき合わせるというふうな感じになる。それはとても辛いことでした。それがあつたために、私は、小学校の同級会というのは行きたいとは思わない。一度だけ、どうしても行かなければならなくて顔を出したことはありますけれども、集団疎開のころのことが思い出されてしまつて、何か暗い集団生活の記憶というのがやはりよみがえってくる。後から考えてみると、幸いにして空襲で近くまで焼け

たけれど、自分のうちは敗戦まで焼けなかった。だから食べるものがなくても、寒くても風呂に入れなくても、そんなことはかまわない。とにかく家に帰りたいということは、みんなが考え、みんなが感じていたことです。それが自分にとっての、十二歳ですかね。それが結局自分にとっての一番切実な戦争体験だったというふうに後になって思います。疎開から帰ってきたのは六年生でしたから、六年生というのは卒業する時期に当たります。卒業すると今度は東京に帰って中学校に進む。中学校は、当時授業はろくにありません。一年上級生からは学徒動員で工場で働いていましたし、われわれは工場に行ってもあまり役に立たないと思われたのか、工場には行かなかった。飛行場の草むしりとか、強制疎開の家屋の引き倒しとかですねそういうところに動員されて作業するうちに敗戦を迎える。敗戦を迎えたのは小金井に来てからですけども長野の疎開先から東京へ帰ってくる日が三月九日の夜だった。当時は、まだ信越線は碓氷峠がアプト式というかつちんかつちんと歯車をかみ合わせながら上ったおりにいったりするような列車が走っていました。夜行列車にのって長野から上野に帰ってくる。九日の夜、長野から夜行列車に乗って十日の朝に東京に着くという予定だったと思います。六年生の子どもたちの間で東京カレンダーというものができました。五年生以下だとそうはいかないのですけれど、六年生は三月に卒業することがはっきりしていましたから、卒業になれば東京に帰ってこの場から離れるということは決められていた。だから疎開地での最終日といいましょうか、疎開地から引き上げる日というものを設定して、それまでに後何日あるかと、だんだん残りの日数が減っていくのを楽しみにしている。一日終わると×をつけるというカレンダーができるようになって、そのカレンダーがすべて×になる日をみんな心待ちにしていた。その最終日が結局三月九日の夜ということになりました。それで、山の上から降りてきて長野電鉄の湯田中という駅に出る。湯田中から電車で長野に出て、長野から何時ごろ乗ったのかははっきり覚えていませんが、夜の九時頃だったでしょうか、夜行列車に乗って東京に帰ってきました。東京に帰るのですが、アプト式の列車に乗って碓氷峠を下りてくると、東の方の空が赤くなっている。はじめは日の出じゃないかと言っていたのですが、汽車が走るにしたがってあれはそんなものじゃない、もっともっとでかい火だ。昔、群馬県にいたことがある先生が関東大震災のときでもあれほどに赤くはならなかったといわれ、もしかしたら帰れなくなるかもしれない。東京が空襲なのかもしれない。ということをお心配しながら、上野駅にたどり着いたのが朝の八時頃ではなかったかと思えます。なんとか列車は上野の駅に着きました。そこでプラットホームに出ると回りがパーッとみやみたいに白くなっていて焦げ臭いにおいがあたりに充満しているん

ですね。プラットホームがそんなふうだということは、駅の外の空気がそういうことになる。これは何だろうと考えながら、でも山手線が走っていたので上野から何とか中野まで帰ってくることができました。ところがあとから知ったのですが、三月九日の深夜というのは十日の未明ですが、東京の大空襲があつて、それが下町のほうを中心に爆撃による火災が広がり、一晩に十万人が死んだといわれていますが、その当日だったのです。これもあとから聞いたのですが、そんなふうにして東京カレンダーを作るような気持ちで一生懸命帰る日を楽しみにして待っていた子どもが、六年生がいざ東京に帰ってみたらうちが無くなっている。親もなくなっている。兄弟がどこに行っているかもわからないというふうなことになるので東京に帰ってきた子どもがいたわけです。本当に、自分が帰りたい帰りたいと思いながら帰ってきて、帰ることができたということが片方にあるために、余計にその辛さがどんなに深かっただろうという気持ちが大変に強く迫ってきたことを覚えています。先日、読売新聞の地方版で戦後七十年、三月十日の大空襲の特集というのを何回かやっております、それを見ていたら下町のほうのある国民学校のすごく生徒がたくさんいっぺんに映っている集合写真があつて、それが三月十日の空襲の前日か九日に卒業生の全員を写したものらしい。それで、十日の空襲にあつたわけです。そうしたら集まって写真に写っている子どもたちの約半数はその日の夜の空襲で亡くなったと書かれているのを読んで愕然としました。実際にやっぱりそういうことであつたのだと改めて思います。空襲はそれだけではなくて、機銃掃射もあつたでしょうし、いろいろ怖いことがあつたのでしょうけれど、そういうことがあつたのを後から知ってますます気がめいってくる。それが三月の十日という日でした。三月十日が来るとなんとなく気が重くなるというふうな感じがありましたが、十日が過ぎたと思ったら今度は三月の十一日に東日本の大震災が起きました。三月のこのあたりというのは何だかわからないけれども、非常に緊迫しているというか緊張を強いられるというか、そういう時期だなということを改めて感じました。戦争は遠くなったし、大震災の復興もいろいろ問題はあるにせよ少しずつ進んでいる。ただし、事故による放射能の問題はそんな簡単に解決するとは思えません。これからは、われわれの暮らしというのは、今、特別賞の作文を読んでもらいましたが、そういうことを考える人が増えていくことによって、だんだんに平和というものが従来に増して切実な形で求められるというふうになっていくのだと思います。その切実さというもの、つまり平和というものは少し前の平和とは違うのではないかというふうに思います。東日本大震災前の平和と震災後の平和というものはちょっと違うように思います。なにが違うかという、それは原発の事故が起きたからで

あって、つまり、放射性物質による被害というものはいろいろな格好でいろいろなところに起こっている。まだはっきりしないものもありますけれども。放射性元素の原子の半減期は十年とか百年とかいうのではなくて、もっと膨大な遠い先の話になっていくらしい。そういう大変な先の話になっているようなものを燃料とする原子力発電というものが有るとこれは大問題です。使用済みの核燃料というものをどう処理すればよいかわからぬままその使用だけが進んでいる。平和そのものが危険な放射能に脅かされている。なんでもなような平穏な日々というそのものの中で日々蓄え続けられていく使用済の核燃料というものが有る以上は、それが平和に影響がないということとはありえないわけで、そういうものまでも含めた平和というものをこれからは考えていかなければならない。ただ平和、平和ということ念じていてもだめなのであって、それでは、自分に何ができるだろうかということが今回の「世界平和のために私ができること」という作文のタイトルになっているのだと思います。ただ平和について論じたり、平和について考えたりというのではなくて、世界平和のために自分が今できることは何かという課題は、非常に大事なことを伝えていると思います。世界平和のために、つまり平和ではないところで苦しんでいる人たちのことまでも含めて考えていく、そのために自分が何ができるのかということ自分の足元をみつめつつ考えていく。それが非常に大事なことはないか。戦争というものは、さあ戦争が始まるぞとか、戦争を始める体制になりつつあるとかというのは、事実としてそういうことが有る場合もちろんあるでしょうけれども、単にそういうものではない。それだけではなくて、もっと非常に日常的な自分自身の暮らしの中で平和につながるもの、その暮らしの中で戦争を遠ざけていくもの、そういうものを見出して見分けていくことが大切なのではないかということ、この作文を読みながら改めて感じました。そういうわけで、小金井とのことに関しては何十年間ここでお世話になって暮らしてきまして昔とはずいぶんいろんなことが変わりました。人口が十万人を超えた。前はどうしても十万人を越えなくて九万何千、九万何千といった時期もありましたが、それが今や十一万人、こんなに沢山のマンションができて、立派な民力といいましょうか、住民の力というものがいろいろな形で表に出てくるようになってきている。そういうところで、平和のために自分たちが出来ることをどうやって探し出すか、それに対してどうアプローチし、接近していくかということを考えることが、とても大事なのではないかと考えております。まとまりの悪い話ではございますが、感想を述べさせていただきました。ありがとうございました。